平成三十年

大津祭（おおつまつり）

天孫神社例祭　国指定無形民俗文化財

10月6日（土）　宵宮
10月7日（日）　本祭

宵宮　夕刻～21:00　本祭　9:00～17:30

9月30日(日)　※山建て8:30～15:00

JR大津駅から徒歩3分／京阪浜大津駅から徒歩5分

特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟

☎077-525-0505 http://www.otsu-matsuri.jp/ 大津祭 検索

協力：陸上自衛隊大津駐屯地 他

お問い合わせ先

大津祭曳山展示館
☎ 077-521-1013

住　所　大津市中央一丁目2-27（丸屋町アーケード内）
開館時間　9:00～18:00(最終入場17:30)　入場無料
休館日　月曜（祝日の場合翌日）、年末年始

大津祭見て歩きマップ

琵琶湖

京阪浜大津駅　京阪島ノ関駅

所望（しょうもん）（からくりを演じる）場所

本祭午前巡行路

本祭午後巡行路

至坂本　至石山寺

NTT西日本　滋賀銀行　中央小学校

石橋山　孔明祈水山　西王母山　殺生石山　布袋（宵宮飾り）　西宮蛭子山　龍門滝山　猩々山　湯立山　神功皇后山　神楽山（宵宮飾り）

11:05　合流　7基　6基　浜通り　中町通り　京町通り

11:15　曳山展示館

曳山展示場所　巡行昼休憩時　12:00～13:45

有料観覧席

月宮殿山　源氏山　郭巨山　西行桜狸山

15:50　国道一六一号線

天孫神社

巡行終了解散 17:30

集合 9:00　出発 9:25　百石町通り

宵宮には曳山等のイラストの場所に曳山や宵宮飾りが展示されます。

Ⓟ は公共駐車場

© Yuki SUZUKIRI

寺町通り　神輿　中央大通り　裁判所　滋賀県庁

16:05　松屋通り　16:30

至京都　ＪＲ大津駅　至草津

至京阪三条

曳山イラスト：梅村 眞司

国指定重要無形民俗文化財 大津祭

大津祭は天孫神社の祭礼で、かつては以前の社名（四宮神社）から四宮祭とよばれていました。日吉山王祭、長浜曳山祭と並んで湖国三大祭の一つに数えられ、滋賀県の無形民俗文化財に指定されています。祭礼は、毎年十月の、体育の日の前日が本祭り、その前日が宵宮です。大津祭の曳山の起源については「牽山由来覚書」という文書に、寛永十五年（1638）、京都祇園祭の鉾を形どった三ツ車の山を建てた（現在の西行桜狸山）、と記されています。その後、安永五年（1776）まで約140年かけて十四基の曳山が作られ、現在では十三基の曳山が巡行しています。

鬮取り式（くじとりしき）

毎年九月十六日には天孫神社において鬮取り式が行われます。鬮取らずで毎年先頭を行く西行桜狸山を除く十二基が、最初に舞殿で本鬮を引く順番を決めるための座鬮を前年の巡行順に引き、その後本殿に移動して本鬮を引き巡行順が決まります。

鬮取り式の前には神輿祓い神事が執り行われ、この日から大津祭の祭礼期間となり、夜にはお囃子の稽古も始まります。

山建て（やまたて）

本祭りの一週間前の日曜日に各山町において一斉に山建てが行われます。作業は早朝から始まり、組み立ては町内が契約した山方と呼ばれる人たちの手により、釘を使わず縄と栓のみで約半日で組み上げられます。午後からは組み上がりを確認するための、曳初め（ひきぞめ）と称する試し曳きが行われ、一般の人が曳き手として参加することもできます。

宵宮（よみや）

宵宮は本祭りの前日に行われる行事です。午後１時から、各山町の周辺を曳き回す宵宮曳きが行われたあと、曳山は町内に留め置かれて大吊り提灯などの飾り付けが施され、夕刻から曳山の上でお囃子が奏でられます。また、からくり人形や本祭り用の懸装品（幕や錺金物）が公開され、間近で観ることができ、町中は夜の九時過ぎまで多くの人で賑わいます。

本祭（ほんまつり）

天孫神社の南側に集合した曳山は、九時二十五分に鬮取らずの西行桜狸山を先頭に巡行を開始します。まず天孫神社の正面鳥居前で止まり、鬮改めのあと最初の所望が奉納されます。午前中はこうした神事があるため囃子方は紋付きを着用しますが、昼休憩をはさんだ午後からは着流しと呼ばれる色とりどりの襦袢半纏姿となり、一段と華やかになります。巡行は夕方の五時半まで市内の氏子中を回り、町は終日お祭り一色の賑わいに包まれます。

所望（しょうもん）

からくりを演じることを所望といい、地元では「しょうもん」と発音します。大津祭のからくりは、中部地方の仕掛けや技を見せることを中心にしたものとは違い、能楽や中国の故事などの、物語の一節を切り取って見せるという、他にはない特徴があります。巡行中25ヶ所で所望が行われますが、その場所には先を赤く染めた御幣が掲げられ、見物に訪れた人にもすぐわかるようになっています。

厄除け粽（やくよけちまき）

蘇民将来伝説に因む京都祇園祭の風習を取りいれたもので、この粽を門口に飾っておくと厄がその家に入ってこないとされています。曳山の上からは、囃子方がそれぞれ自らが購入した厄除け粽を盛大に撒き、御利益を授かろうと、それを受けるのも大津祭の楽しみのひとつとなっています。（※中に餅は入っていません）

西行桜狸山（さいぎょうざくらたぬきやま）

鬮取らず　鍛冶屋町

寛永十二年（一六三五）

塩売治兵衛が狸面を被って踊った事が発祥となった大津祭最初の曳山。明暦二年に西行法師が桜の精と問答を交わすカラクリを採り入れ、西行桜狸山となった。曳山の祖となった狸は屋上に載せられ、祭の先導をする守護となった。このため、この山はくじを取らずに毎年巡行の先頭を行く。所望は、古木から桜の精が現われ西行法師と問答をする。

猩々山（しょうじょうやま）

南保町

寛永十四年（一六三七）

能楽の「猩々」から取材したもの。むかし唐の国の楊子の里に住む高風という親孝行の者がいた。ある夜、夢に「楊子の町に出て酒を売れ」と教えられ、売っていると、海中に住む猩々から、酌めども尽きず、飲めども味の変らない酒の壷を与えられたという。所望は高風が酌をし、猩々が大盃で酒を飲み干すと、たちまち顔が赤く変わる。

西王母山（せいおうぼざん）

丸屋町

明暦二年（一六五六）

謡曲の「東方朔」から取材したもの。むかし崑崙山に住む西王母が天女とともに舞い降り、帝に桃の実を捧げ、長寿を賀した。この桃は三千年に一度花が咲き、一個しか実らない貴い桃であった。ここから俗に「桃山」と呼ばれる。所望は、桃が二つに割れ、その中から童子が現れて所作をする。これは桃太郎説話が加味されたものとも云われる。

西宮蛭子山（にしのみやえびすやま）

白玉町

万治元年（一六五八）

町内の伝承では、古くから西宮の蛭子を祀っていたが、後に曳山に載せるようになり、鯛を釣りあげた蛭子に商売繁昌の祈りを込めるようになったとある。所望はえびすさんが鯛を釣り上げる所作で人気がある。この所作から俗に「鯛釣山」と呼ばれている。創建当初は宇治橋姫山と称していたが、延宝三年以後、いまの西宮蛭子山となった。

殺生石山（せっしょうせきざん）

柳町

寛文二年（一六六二）以前

能楽の「殺生石」から取材したもの。鳥羽院に寵愛された玉藻前は、実は金毛九尾の狐で帝の生命を奪おうとしていたのを安部泰親に見破られ、東国に逃れ、那須の殺生石となって旅人を悩ましていたが、玄翁和尚の法力によって成仏したという。所望は玄翁和尚の法力によって石が二つに割れ、女官姿の玉藻前が現れ、その顔が狐に変る。

湯立山（ゆたてやま）

玉屋町

年未詳（寛文年中湯立山）

天孫神社の湯立ての神事はこの山から捧げるといい、曳山は天孫神社を型どり、周りはその廻廊を真似たものである。所望は称宜がお祓いをし、市殿が笹で湯を奉り、巫女が神楽を奏する。昔からこの湯をかけられたものは五穀豊穣、病気平癒、商売繁盛など縁起がよいという。創建当初は孟宗山といっていたが寛文年間にいまの湯立山となった。

郭巨山（かっきょやま）

後在家町　下小唐崎町

元禄六年（一六九三）

郭巨は中国二十四孝の一人。家は貧しく、子供が生まれて老母は自分の食を減らして孫に与えねばならなかった。「子供は又得られるが母は再び得ることはできない」と、郭巨は妻と相談し、子供を土中に埋めようと穴を掘ったところ、そこから黄金の釜が出てきたという故事による。所望は、郭巨が鍬で土を掘ると黄金の釜が出てくる。

孔明祈水山（こうめいきすいざん）

中堀町

元禄七年（一六九四）

蜀の諸葛孔明が魏の曽操と戦ったとき、流れる水を見て「敵の大軍を押し流して下さい」と水神に祈り大勝をした故事によるが、古い資料には、水に渇した孔明が趙雲に命じ、土を掘らせたら泉が湧いた、ともある。所望は、孔明の前に立つ趙雲が鉾で岩を突くと、こんこんと水が湧き出し、それを見た孔明が羽扇をうち振り喜ぶ様をあらわす。

石橋山（しゃっきょうざん）

湊町

宝永二年（一七〇五）

謡曲の「石橋」に取材したもので、大江定基入道寂昭が宋の国に渡り、清涼山にある文珠菩薩の浄土に続く険しい石の橋を渡ろうとしたとき、文殊菩薩の使いである獅子が岩の中から現われて、牡丹の花に舞い戯れるのを見たというもの。所望は、岩が開き、僧寂昭の前に唐獅子が歩み出てきて牡丹の花に戯れ遊んだあと、岩の中に戻ってゆく。

龍門滝山（りゅうもんたきやま）

太間町

享保二年（一七一七）

黄河の上流の龍門山の滝。魚は登ることができないが、もし登る魚があれば、昇天して龍になるという故事に因んでいる。登竜門という語はここから出たもの。所望は龍門の滝を鯉が躍り上がる所を見せる。鯉の滝登りは曳山のからくりとしては他に例がなく、たいへん貴重なもの。見送りはベルギーのタペストリーで重要文化財に指定されている。

源氏山（げんじやま）

中京町

享保三年（一七一八）

紫式部の「源氏物語」をテーマにしたもの。大津祭の曳山の中で、唯一大津に由来したカラクリを採り入れたものである。紫式部人形の十二単や曳山を飾る部品、欄干を見ると平安の昔を偲ばせるつくりで、女性的なデザインである。曳山に乗る緑色の岩は石山寺の観月台を模し、所望は紫式部が月を見ながら構想を練る様子を表現している。

神功皇后山（じんぐうこうごうやま）

猟師町

寛延二年（一七四九）

神功皇后が戦さに先立ち、鮎を釣り戦勝を占ったとされる伝説に因む。神功皇后は当時懐妊されていたが、戦さが終って後、応神天皇を無事出産されたことから、「安産の山」として信仰されている。所望は、皇后が岩に弓で字を書く所作をすると、岩に次々と文字が現われてくるからくりで、文字書きからくりとしては漸新な機構とされている。

月宮殿山（げっきゅうでんざん）

上京町

安永五年（一七七六）

謡曲の「喜多流月宮殿」から取材したもの。唐の皇帝が長生殿で新年を祝う節会を催され、世を寿がれたというもの。所望は、鶴と亀の冠をつけた男女の舞人が、皇帝の前で舞を舞う。そこから俗に鶴亀山とも呼ばれる。ベルギー製で重要文化財の見送り幕を所有するが、現在は平成十一年十月に復元新調されたものを使用している。

神楽山（かぐらやま）

宵宮飾り　堅田町

寛永十四年（一六三七）

三輪明神を祀っていたことから、創建当初三輪山と称していたが、享保九年に改造され神楽山となった。安政六年を最後に巡行しなくなり、現在は三輪明神・市殿・禰宜・飛屋の四体の人形と、中国清代初期の官服を仕立てた見送幕、前懸幕の「瓶割図刺繍」、胴懸幕の「耕織図刺繍」が宵宮と本祭の両日、堅田町内に飾られる。

布袋ねりもの（ほてい）

宵宮飾り　新町

元禄六年（一六九三）以前

ねりものとは今でいう仮装行列で、江戸時代の大津祭には、多くの氏子町からねりものが出されていた。新町の布袋は、元禄六年の記録に登場することから、それ以前の創建であることがわかる。現在、宵宮と本祭に町内で飾られる布袋の人形は、文化七年に新調されたもの。全高二メートルを超え、かつては人が中に入って練り歩いた。

神輿（みこし）

下百石町

寛政九年（一七九七）以前

寛政九年の伊勢参宮名所図会に「御輿祓いの日に百石町より紙の御輿を出す」とある。この頃の神輿は、フスマのような紙貼りの神輿であった。弘化二年に神輿の新調があったという記録があり、現在の神輿の鳳凰や瓔珞は、この時のものである。昭和三十年代までは、天孫神社の神輿とともに渡っており、国指定を機に渡御が復活した。